



TITLE:

静脩 Vol. 17 No. 3 (1980.10) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 17 No. 3 (1980.10) [全文]. 静脩 1980, 17(3)

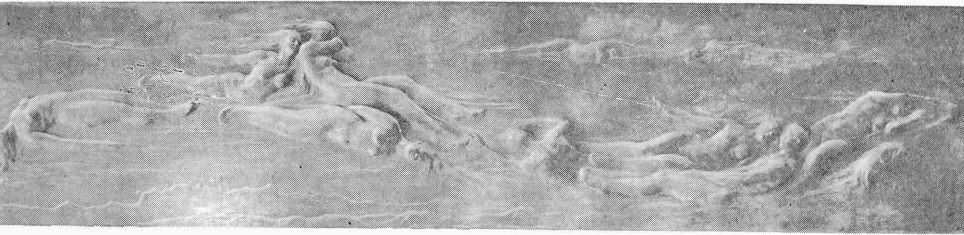
ISSUE DATE:

1980-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65971>

RIGHT:



静脩

1980年10月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 17, No. 3

「物理学国際会議録目録」について

数理解析研究所教授 一 松 信

昔から図書館所蔵の文献は、単行本と雑誌（定期刊行物）とに二分されていた。もちろん以前でも、年鑑、叢書、講座といったこの中間的な形態の出版物があったが、何とか上記のどちらかに編入しても、差し支えなかった。

近年になって、上記両者の中間的な準定期刊行論文集という形態の出版物が激増してきた。少くともいくつかの分野では、その重要性が、在来の雑誌や単行本をしのぐほどになってきた。筆者の関連する分野でいうと、物理学においては、研究の速報性が極度に重んぜられている。雑誌も月刊ではまにあわず週刊誌になってきている。プレプリントの類の配布が事実上の発表であって、在来の形式の論文が印刷公表された時期には、その内容は周知の事実になっていることが多い。また計算機科学は、新しい分野であるために、論文を発表する適当な媒体が乏しく、重要な研究が国際会議録の形で発表された例が少なかった。

このような出版物に載った論文は、検索しにくいことが多い。その理由の一つは、文献の引用が不備であって、不完全な情報から検索をしいられることが多いためである。他の理由は、在来の図書の配列法が、この種の論文集に対して不適切な場合があるためである。

こういうと、きちんと引用しない著者がけしからん、という話になる。しかし国際会議録のよう

な出版物の完全な書誌情報を書き上げることは、専門家でも容易でない。最も利用者にとって最も重要なキーワードが、著者名や書名ではなく、むしろ会議の開催地、開催年月日、会議の回数といった、普通の単行本にはない情報である場合も多い。引用された地名や年代が、その本の出版社の所在地と出版年であり、会議そのものの開催地・開催年とはくい違っていた例も少なくない。その上高額の論文掲載料を少しでも安くしようと、涙ぐましい努力をしている著者として、引用をできるだけ短くきりつめたくなる気持はよく理解できる。しかし余りに略しすぎると、少し専門の違う研究者には、略字が何を意味するのかさえ、理解できなくなる。

じっさいに、所属の機関の図書室でたずねたがわからず、他大学にたのんでコピーを作ってもらったが、後に偶然の機会に所属機関の図書室にもその論文集が所蔵されていることがわかった、という実例も、けっして少ない。

もちろん一方では国際会議録出版責任者が、十分に注意して、容易に検索できるように必要十分な書誌情報を表紙や扉に書いて下さることを望みたい。しかし既に刊行されている分については、何とかして検索するための道具を用意するしかない。不完全な断片的な情報からでも、とにかくその論文集にたどりつける検索システムが完備すれ

ば、配列の問題も合わせて解決できる。というのは、極端に言えば、図書館内でどのように並べてあっても、一冊一冊の本来の場所がただちにわかり、すぐにそれを取り出せるものならば、利用者側には十分に満足できるはずだからである。

この目的には、在来の図書館カードは限界にきている。地名、時期、主題その他のいろいろの項目ごとにカードを作ったのでは、膨大になりすぎ、手間ばかりかかって利用されないはめになるからである。当面の解決策は、論文集の目録を作ることである。さらに進んで、書誌情報を計算機に投入し、各種のキーワードで検索できる体系を作り上げるのがよい。

こういう声は、あちこちから上っていた。はからずも1977年から、基礎物理学研究所、理学部物理学教室、数理解析研究所の図書室関係者の定期的な話し合いが始まった。そしてまもなくその席で、物理学関係の国際会議録目録作成を共同の作業として進める申し合せができた。

この作業は、ちょっと考えると簡単のようだった。三機関の図書室からカードを持ち寄り、つき合せてタイプすれば、主要な部分はできそうだった。ところが実際に始めてみると、そんな単純な話ではなかった。カードの記載方法の不統一もさることながら、会議録の表紙だけからでは、十分な書誌情報が採録できていない例が続出した。そのため原著にさかのぼって調査が必要だった。

そのうちに悠もでてきた。対象を定期的に行われている継続会議に限定したが、せっかくなら、各会議に解題をつけ、会議名の変遷、略称、愛称なども収録する必要性を感じた。上記三機関に所蔵されていない欠号分の情報も、できるだけ含めることにした。

そうしたことで2年余りかかった。そのうちにこの目録は、京都大学以外の研究者にも有用であろうというので、中心になって推進して下さった基礎物理学研究所の小沼助教授のお世話で、基研で印刷し、関係諸機関に配布して利用していただくことになった。これが標題の冊子である。今回の1980年版は、一つの暫定版にすぎない。他の諸

大学での所蔵報もつけ加えたいし、何よりも欠号の情報が気になる。会議録が出版されなかったのか、既に発売元にも品切れなのか、それとも誰か出版した学者が個人的に所蔵しているのではないかと、といった類のことである。

しかし私達は、これを世界にも類のない珍しい目録だと自負している。今回も少数を外国に送ったが、もっと完備すれば、堂々と輸出できる出版物であろうと思っている。この内容を計算機に投入する作業も始めている。またこれと平行して集めた計算機科学、数学関係の国際会議録のデータベースも既に作成をほぼ完了し、大型センターでP I C M Sとして試用に供している。

データベースとしては小規模のものであるが、この作業に関係して、国際会議の「生理学」といったものを知ることができたのは幸いであった。正式の国際機関が何年かに一度定期的に開催を定めた「正式の子供」も少くないが、他の形態のものも多い。関係者が集って研究集会を開いたところ、有益だというので、2回目、3回目と開かれ、とうとう正式の国際会議になってしまった例が多い。他方、資金難とか、使命を果たしたとして、数回で廃止になった会議もある。2回開かれて立ち消えかと思ったら、数年後に第3回が開かれて、息をふきかえした形のものもある。こういう知識は、単にマニアが重箱の隅をつつく話ではない。そういった経過をよく知らないと、第何回という番号さえ正しく判定できないことがある。

また研究者の数や分野の性格の差により、たとえば数学と物理学と計算機科学とにおいて、国際会議の回数、規模、性格などが著るしく違うこともよくわかった。

しかしまことに皮肉なことに、現在までのところ私自身にとっては、この目録もデータベースも検索の目的には余り利用する機会がない状況である。というのは、この作業を熱心に進めた有能な何人かの図書室職員の方が、一千件余りの内容の大半を覚えてしまったため、計算機にきくよりも早くて確実な情報を教えてくれる場合が多いからである。これはある意味では大変に有難い状態である。

ある。そしてまた計算機を万能視するな、有能な人材をも忘れるな、という警告でもある。もちろんいつまでも、特定の人にたよってはいけなないのであって、だからこそ計算機による検索を研究しているわけである。

反面、研究者が真に必要な情報を適確にうるには、漫然と端末機の前に坐って計算機に問い合わせるだけでは不十分であり、よくなれた係員

の協力をうる必要が大きいことも痛感した。

ここに記したことは、かなり特殊な分野の特殊な研究者の話であるが、他分野の方々にも、情報検索について参考になる点があれば幸いと思って筆をとった。と同時に、本務の余暇にこれだけの仕事をなしとげた三機関の関係者の方々（というと私自身も含まれてしまうのだが）の御協力に感謝の詞をのべたい。

—— 解説・コンピュータによる情報検索① ——

コンピュータによる情報検索が時代のすう勢となっているが、京都大学大型計算機センターでは情報検索システム FAIRS (Facom Advanced Information Retrieval System) を用いて、研究上必要な情報や各種のデータなどが検索可能となっている。同センターで運用されているデータベースには、INSPEC (物理学, 電子・電気工学制御工学, 機械工学関係), XDCBIB (結晶構造), RIMS (数学, 物理学関係), DESY (高エネルギー物理学関係), SAO (16等星以上の星のデータ) 等々があるが, 9月8日からは PICMS (数理科学の国際会議関係) 及び ERIC (教育学関係) のデータベースの運用が開始された。

これまで図書館では、手作業で文献情報や書誌情報の検索を行ってきたが、このような情報検索システムによって、迅速・適確かつ網羅的に情報検索を行うことができる。また、コンピュータ端末機器の発達に伴い、電話回線を利用する方式等も普及してきており、図書館や研究室からはもちろん、家に居ながらにして情報検索を行うことさえ可能な情勢になっている。

そこで本誌では、図書館利用者のために、各種のデータベースについて初歩的な段階の解説を試みる。今回はその第1回として、ERIC について概略説明する。

ERIC (教育学関係データベース) について

教育学部図書掛長 村 田 修 身

1

ERIC は Educational Resources Information Center (教育情報源センター) の略称で、アメリカ政府の教育局 (U. S. Office of Education) が教育情報の収集と配布を目的として1965年に設立したネットワーク・システムである。現在はワシントンにある米国教育研究所 (National Institute of Education) に本部を置き、これがアメリカ各地に配置された16のクリアリングハウスその他の組織全体を統括している。各クリアリングハウスはそれぞれ特定の主題分野を分担して、情報を分析・評価・選択・抄録及び索引作業を行っている。

これら情報網を通して収集された情報は、(i)雑誌記事を対象とした CIJE (Current Index to Journals in Education) と、(ii)研究報告書や会議録等を対象とした RIE (Resources in Education) とに分けて、月刊誌の形または磁気テープによって頒布される。そこに収録されている文献の記述は図1のようになっている。

CIJE は1969年より教育諸科学及びそれに関連する雑誌約230誌を対象として発足したが、現在では700以上の雑誌が収録の対象となっている。1979年末までに収録された文献は、CIJEとRIEとを合せて約38万件にのぼっている。

Accession No.	EJ 123 465	RC 503 097	Clearinghouse No.
Article Title	Native American Techniques of Survival in the Country. Price, John A. Indian Historian; v11 n4		
Author	p3-11 Dec 1978 (Reprint: UMI)		Issue No.
Pages	Pub Type: Historical Materials (060); Reports (140)		Volume No.
Pub Type	Descriptors: *American Indians; Fire Science Education; *Foods Instruction; *Medicine; *Outdoor Education; *Plant Identification; *Safety; Trees		Journal Title
Major and Minor Descriptors (major descriptors are starred)	Identifiers: American Indian Education; *Survival Techniques		Availability
Major and Minor Identifiers (major identifiers are starred)	Presenting a review of basic information, this article presents the following: (1) building a shelter, (2) making a fire, (3) finding and keeping food, (4) safety and medicine, (5) orientation to directions, and (6) aids in traveling in the country. (RTS)		Publ. Date
			Annotator's Initials

図

1

2

ERICのデータベースは CIJEと RIE とに分かれているわけであるが、FAIRS ではそれらを同時に検索することも、あるいは個別に検索することも可能である。コンピュータによる情報検索のメリットは、いうまでもなく、その迅速性や網羅性にあるが、複合主題の検索時などには手作業に比べて格段の利便がある。では以下に、FAIRS による検索について簡略に説明しよう。

(1) シソーラスについて

情報検索とシソーラス (Thesaurus. 索引語彙表) とは関連が深いが、ここではシソーラスがなくても検索が可能である。シソーラスの構成単位であり、検索の際の手がかりとなる語であるディスクリプタ (Descriptor) を知らなくても、ディスクリプタに採用されている (と思われる) 語またはそれに近い形で検索できるし、BROWSE という機能を使ってディスクリプタを表示させることもできる。図2は、ライブラリー・オートメーションに関する文献を探すのに、ディスクリプタがわからないので、「ライブラリー」と「オートメーション」とに分けて検索を試みた例である。LIBRAR@としたのは、LIBRARYや LIBRARIES といった語をもれなく拾い出すためであり、AUTOMAT@としたのも同様に AUTOMATION ばかりでなく AUTOMATIC といった語なども含めて検索するためである。なお、SEAはSEARCH

の略であるが省略せずに入力してもよい。また、DEはDESCRIPTORの略、EQはEQUAL の略である。ANDは論理積を求める コマンドであり、OUT はその検索結果を出力させるものである。(ここでは抄録やディスクリプタ等の表示を除いた形を標準出力としている。)

(2) 主題から検索する場合

上述のように、ディスクリプタによって検索する方法が有効であるが、ディスクリプタに未だ採用されていないような専門用語や研究プロジェクト名等については、ERIC ではアイデンティファイア (IDENTIFIER. 略称はID) というシソーラスの統制下でない語彙を備えている。図3は、REFERENTIAL COMMUNICATIONに関する文献を検索しようとして、まずディスクリプタによるアプローチをしたが見つからないので、アイデンティファイアによって引き直したものである。その検索結果に加えて、論文名の中に REF-ERENTIAL 云々という語を含むものを検索するためにOR という論理和を求めるコマンドを使用し、さらにその結果の中から最近2年間の極く新しい文献を選り出させたところまで示してある。TIはTITLEの略、PYはPUBLISH YEAR の意である。GEは 不等号> と 等号=と、つまり「より大きいか等しい」の意であり、ここでは1979年以降の文献に限定したことになる。

```
RS> SEA DE EQ LIBRARY
+FRS100I 1165 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
RS> AND DE EQ AUTOMATE
+FRS100I 4 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
RS> QUT
```

ERIC INFORMATION RETRIEVAL SYSTEM OF KYOTO UNIV.

```
#1
EJ ACCESS NO  ED168471
PUBLISH YEAR  78
TITLE          INDEXING THE COMICS: A LIBRARIAN'S PERSPECTIVE ON COMICS
                RESEARCH.
DESCRIPT NOTE  13P.; PAPER PRESENTED AT THE ANNUAL CONFERENCE OF THE MIDWEST
                POPULAR CULTURE ASSOCIATION (6TH, EAST LANSING, MICHIGAN,
                NOVEMBER 2-4, 1978)
AUTHOR(S)      SCOTT, RANDALL W.
```

図2 (検索結果の打出部分#2以下は省略)

(3)著者から検索する場合

著者名の表示方法は、目録作成者にとっても苦勞させられるところである。極く単純な姓名の場合でも、文献目録や書誌類あるいは論文執筆者の引用の表示の仕方等、それぞれ異なった表わし方がされている場合が屢々ある。たとえば、Jesse H. Shera は次のようないくつかの表記がなされる。

- ①SHERA, J H
- ②SHERA, J. H.
- ③SHERA, JESSE H
- ④SHERA, JESSE H.

.....

われわれが眼で見た場合、これらはすべて同一人であろうと読みとることができるが、コンピュータにとっては、それぞれ別の人ということになってしまう。そこで、典拠ファイルによって統一した著者名を採用するわけである。その統一され

```
RS> SEA DE EQ 'REFERENTIAL COMMUNICATION'
+FRS101I NO RECORDS FOUND
RS> SEA ID EQ 'REFERENTIAL COMMUNICATION'
+FRS100I 1 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
RS> OR TI HAS REFERENTIAL@
+FRS100I 5 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
RS> AND PY GE 79
+FRS100I 4 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
```

図3

た形はBROWSE というコマンドによって、求めるものを含む近辺を表示させることができる。また、自分の探したいもの（ここでは著者名の綴り）が不明確な場合にも、この方法で調べることができる。

図4は、SHERA についてブラウジングして、正確な綴りを調べてから検索した例である。この例では著者名の綴りを逐一タイプインしているが、そのかわりに語番号(W-NO.) を使用してもよい。BROはBROWSEの略、AUはAUTHORの略である。

```
RS> BRO AU EQ SHERA

+FRS200I BROWSING OF ELEMENT 'AU'
      W-NO.      RECORDS  VALUE
#00001           1 SHEPPARD, C. J. R.
#00002           1 SHEPPARD, GLENN
#00003           1 SHEPPARD, N. ALAN
#00004           5 SHER, JONATHAN P.
#00005           1 SHER, LAWRENCE
(*)#00006         2 SHERA, JESSE H.
#00007           2 SHERAS, PETER L.
#00008           1 SHERIDAN, BARRETT E.
#00009           1 SHERIDAN, DANIEL
#00010           1 SHERIDAN, E. MARCIA
#00011           1 SHERIDAN, JACK

RS> SEA AU EQ 'SHERA, JESSE H.'
+FRS100I 2 ARTICLE/DOCUMENT(S) FOUND
```

図4

上記の各検索方法の他に、雑誌名(JOURNAL NAME. JN と略す)等を対象とした検索も可能

であり、それらを組み合わせることによって、より有効な情報検索を行うことができる。

3

以上、ERICとその検索について簡略に述べた。紙数の制限から、ERICのカヴァーする主題範囲やその特徴等について述べるゆとりはもはやないが、ERICは、教育諸科学とその関連領域（心理

学、社会学、あるいは医学の分野まで）にわたるかなり学際的な広がりを持ち、それに対応した広い研究者層の要求に応じ得ることを附言しておく。また、ERIC以外の人文・社会科学系のデータベースと併せて使用することによって、より有用な情報検索への道が開かれることであろう。

大学図書館職員長期研修に参加して

文学部図書室 森 稔 夫

去る8月4日から8月23日までの3週間、東京学芸大学を中心として上記の研修が行なわれた。研修の行なわれた施設及び見学先は20ヶ所程にも及び、それぞれが特色のある活動を行なっており大変参考になった。

この研修では36名の参加者は自然系と人文・社会系とにそれぞれ18名づつに分かれたが、参考業務の実習以外は同一のカリキュラムで行なわれた。今から思うと自然系と人文・社会系とに分ける必要性は余り無かったのではないか。というのも、異った分野の実情を知る事は、お互いに刺激にもなり、そこから得る所も多いと思われるからである。もちろん図書館のサービスといっても、それぞれの学問分野によってその性格が多少異っているのも事実である。例えば自然系と人文系とでは、利用者の要求するサービスにしても、前者は雑誌等を中心とし、速報性を重視するのに対し、後者はどちらかというと単行書を中心として、速報性に対してはそれほど厳格性は要求されないといった点などである。

さて、この研修ではこれからの大学図書館の在り方についての、マクロな視点からの長期的ビジョンが提起された。本年1月、学術審議会から出された答申「今後における学術情報システムの在り方について」は、これからの日本の文教政策の中でも重要な位置を占める様に思われる。この答申は、国家的見地からの学術情報システムを指向しており、図書館だけを対象としたものではない

が、その計画の中では図書館、特に大学図書館の果す役割には大きいものがある。

この様なトータルな学術情報システムが考えられるようになった背景には様々な要因があるが、一口に言えば学問の進歩に対する情報の提供をする側の立ち遅れであり、そのギャップを埋めるための対応であり、それを可能とする技術的背景として、コンピューターや通信技術の目覚ましい進歩がある。

問題を図書館に限定してみると、先ず第一に一次資料の充実が必要であり、次に全国的ネットワークの問題がある。計画されている全国的ネットワークの構成は、中枢センター、ローカルセンター、端末館といった重層構造を持っており、各図書館は端末館の位置を占める。京大などの場合は、学内の図書館群が学内のネットワークによって一つにまとまる必要があろう。

オンラインネットワークシステムを利用して計画されているものには次の様なものがある。

(1)目録業務の機械化；LC-MARC, JAPAN-MARC, ローカルインプット等を用いてのShared Cataloging.

(2)オンライン情報検索；データベースを利用した参考業務。

(3)所在情報の形成；雑誌の場合で言うと学術雑誌総合目録を基本とし、単行書の場合には(1)のShared Catalogingに並行して所在情報も形成される。が、既に所蔵されている膨大な単行書につ

いての全国的所在情報の形成には多くの困難が伴うであろう。

これらは壮大な計画であり、実現には当然困難も予想されるが、既に欧米に於いては様々のネットワークが実際に稼働しているのであるから、不可能ではないであろう。その場合当然のことながら、個々の図書館と、その中で働く図書館員の協力は不可欠である。全国の何百、或いはそれ以上の図書館を巻き込むこの様な計画は、図書館界にとっては革命的な出来事であろう。

ではこれに対して実務に携わる我々図書館員は

どう対処すべきであろうか。図書館の基本的使命は先ず第一に利用者へのサービスである。そのサービスをいかに効果的に行うかが図書館員に与えられた課題であると思う。全国的ネットワークの完成はまだまだ先の事であろうが、たとえそれが完成したとしても、個々の図書館の役割は増大こそすれ減少する事はないであろう。そう考えると各自の置かれた状況に於いて日々、問題意識を持ちながら、地についた営為に努めるべきであろう。マクロの視点とミクロの視点を両方兼ね備えた複眼的思考が要請されている様に思う。

—— 図書室めぐり ——

霊長類研究所図書室

犬山の駅に降り立つと、町はずれの高みに灰色の大きな建物がみとめられる。増築を重ね、設立後10年目に当たる1977年に完成した霊長類研究所の本棟である。徒歩約20分の道のりは都会人には少々遠いが、カワセミやカイツブリにみとれ、イタチに驚き、足元の野草にひそやかな花を見つつ歩を運べば、いつの間にか着いてしまう。

さて、敷地内には、正面に本棟、左手前に宿泊棟、右手前に本年6月に竣工した繁殖コロニー、本棟西端に接し犬山城をバックにしてサル施設棟、サルの屋外ケージ、育成舎、放飼場といった具合に、隣の日本モンキーセンターとの境界までいっばいに附属施設が連なる。

霊長類研究所は、霊長類に関する総合研究を目的として、1967年6月に創設された。9部門2施設、職員数80余名の研究体制をとっている全国共同利用研究所で、図書室は、各研究部門の校費で購入した図書・雑誌を一ヶ所に集中するという形で運営されている。永年、教官研究室の一つを図書室にあて、書庫・閲覧室・コピー室・事務室をかねていたが、現在は、本棟3階の西端に一面を占めている。ソファーと大机を備えた雑誌閲覧室。開架式書庫と6つの個席。コピー機、欧文・和文のタイプライター、簡易製本機、スライド作成機、その他でいささか手狭なコピー室。事務室



では司書2名が日常業務にあたっている。

9つの研究部門が示すように、霊長類学とは学問の全分野にまたがる広い研究分野である。しかし、サルそのものを対象にした研究書となると、これが意外に少ない。せめて手にはいるものはすべてそろえて、霊長研にいけばサルの本は何でもある、という状態にしたいと願っている。境界領域をカバーするものや参考図書の性格のものを備えるために、図書室独自の選択に委ねられた図書購入予算がついており、教官4名で構成される図書委員会が、所員からの推せんに基づいて選書している。1980年7月現在、蔵書数6,000冊余。うち製本雑誌が約2,000冊。継続購読中の外国雑誌が約100タイトル。和雑誌約20タイトル。蔵書数はまだ少ないが、長谷部言人博士の蔵書の一部を

譲り受けた人類学関係書をはじめ、3つの個人文庫を含む。また、霊長類に関連する内外の最新の研究成果を集中する目的で3年前に始めた別刷コレクションがある。これは間もなく15,000点に達し、情報検索面に加えて現物を手もとに置いている、という強みである一方、収納場所の問題が既に現実となってきた。

研究所は遠隔地にあればなお一層独自の充実した図書室と相互利用面での優遇が望まれるのだがむしろ逆に、とぼしい蔵書、不備な二次資料、相互利用における様々な制限といった不便さにかかっているのが現状ではなかろうか。幸い霊長研は名古屋大学等近隣の他大学に多くを負って来ているが、一日も早くお返しをしたいものである。

第54次国立七大学附属図書館協議会及び 第13回国立七大学附属図書館部課長会議

9月25日～26日、北海道大学の当番で、札幌市の国家公務員共済組合保養所 青巒荘において、第54次協議会が文部省学術国際局 田保橋情報図書館課長の出席を得て第1日及び第2日に、第13回部課長会議が、第1日に開催された。

協議会では、次の議題が協議された。

- 1). 研究用文献の相互利用について
- 2). 「学術情報システム」に対応する学内体制について
- 3). 学内における中央図書館の地位強化について

- 4). 大規模図書館分館の分館長の待遇改善をはかることについて

- 5). 「学術情報システムの在り方」に関連する全学的大学図書行政の対応について

- 6). 学内における学術審議会答申への対応について—とくに附属図書館の立場から—

次に部課長会議では、公衆回線によるオンライン検索の端末の利用に関する経理上の問題、とくに私費扱いの経理上問題及び非常勤職員の処遇等当面する事務処理上の諸問題について協議された。

近畿地区国公立大学図書館協議会

第5回館長・事務(部・課)長連絡会議

第5回の近畿地区国公立大学図書館協議会館長事務(部・課)長連絡会議は、9月5日に京都府立大学の当番で、平安会館を会場に開催された。

連絡会議の概要は、次のとおり。

I 館長連絡会議

協議題「現下の図書館の諸問題」

- 新築移転に伴う問題
- 蔵書の内容
- 部局図書室・研究室と附属図書館の関係
- 学習図書館の考え方
- 各大学図書館の相互協力の問題等が協議された。

I 事務(部・課)長連絡会議

協議題「現下の図書館の諸問題」

- 人の問題
- 施設の問題
- 夜間開館に伴う問題
- 経費の問題
- 各大学図書館の相互協力の問題等が協議された。

1. 合同会議

館長連絡会議の報告

事務(部・課)長連絡会議の報告

これらの報告事項について、協議され、特に相互協力の問題について、本年度の国立大学図書館協議会総会での図書館相互協力調査研究班の報告「国立大学間における図書館相互利用制度の整備について」の審議内容を中心に意見の交換が行われた。